台湾から富山への観光交流において求められるニーズと今後の発展

Needs and future prospects for tourism exchange Taiwan to Toyama

人文科学系／観光学／論文

地域キュレーションコース
室谷　榛乃
Murotani Haruno

◉研究目的

現在、日本は国をあげてインバウンド誘致に取り組んでいる。2019年には過去最多の3188万人に達した。台湾市場は2019年時点では中国の２分の１の15%であったが、2023年は全体の17%を占め、森国に次ぐ割合まで大きくなった。富山県も同様に台湾との観光交流に力を入れている。富山県のインバウンド事情を明らかにするとともに、台湾から富山県への観光交流において求められる台湾人のニーズと今後の発展について考察する。

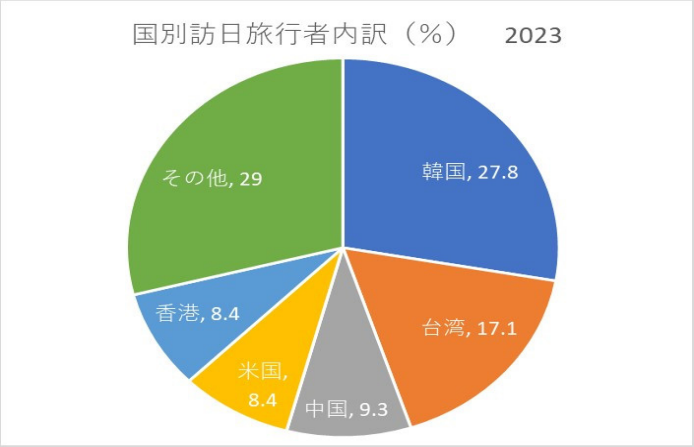

図1 国別訪日旅行者割合　JNTO日本の統計データより筆者作成

◉研究方法

富山県と台湾の観光交流の現状を知るために、スノーボールサンプリングを用いて県内に在住している富山県、高岡市、立山町、射水市の行政職員や活動組織計７人のキーパーソンにヒアリング調査を行った。そこで得られた情報を分析し富山県における台湾との観光交流の実態を明らかにしていく。また、富山県を訪れる台湾旅行者のニーズはどこにあるのか、富山県において観光交流は何が起因でどう発展していくのか、今後について考察していく。

◉富山県における台湾人旅行者のニーズ

台湾人旅行者は一般的に訪日旅行に対して「美しい風景」、「グルメ」の２つを重視している。富山県はどちらの要素も含んだ観光資源が豊富にある。その中でも、富山県に訪れる台湾人旅行者は旅行経験や旅行形態、年齢層、によって求められるニーズが異なるのでそれに見合う観光資源も異なることが明らかになった。立山黒部アルペンルートは言わずもがな人気であり、一方呉西エリアは旅行経験が豊富でニッチな観光を求める個人旅行者や、時間と金銭面で余裕のある中年以上の旅行者に需要があるのではないかと考察した。また、最近では特個人旅行でレンタカーの利用が進んでいるため、二次交通の不便さという負い目を転換できる可能性がある。富山県を含めた中部 - 東海の周遊ルートは既に確立されており、現在台湾人旅行者にとっての呉西エリアはその通過点という位置づけである。富山県内では各市町村、民間団体や個人が日台交流を盛んに行っている。富山県に訪れる台湾人旅行者にリピーターが多いのは富山県を含めた中部北陸地方の観光資源が分散していて１度の観光で周遊しきれないためである。そのため、富山県に台湾人旅行者を誘致するためにはいかに県同士で連携し動いていけるかが重要である。

図2　青山日台祭の様子　高岡市観光協会よち提供

◉様残な交流形態と発展の仕方

観光交流は台湾人旅行者が旅行目的で訪れた場合のみならず、県内で発生している様々な交流形態が起因となって発展していることが明らかになった。主な交流形態としては、学校交流、民間交流、スポーツ交流、市民交流、国際交流が挙げられる。これらの交流は民間で個々人が身近に参加することができる。観光交流に発展させるためには、まずはエンドユーザーとなる台湾人に「知ってもらう」ことが前段階として何よりも重要である。「知ってもらう」ためにはまずきっかけづくりが必要である。この段階にあるのが行政や民間組織、個人の取り組みである。民間交流は１件の規模は小さいものの、数と時間が積み重なり観光交流へと大きく発展していく。今後はさらに行政と民間や地域同士が補填し合いながら日台交流を継続していくことが求められる。